

源氏物語の「秘色」と「あをし」

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

秘色「されど、みづからは見えたまふべくもあらず。几帳など、いたく損なはれたるものから、年経にける立ちど変はず、おしやりなど乱れねば、心もとなくて、御達四、五人ゐたり。御台、秘色やうの唐土のものなれど、人悪ろきに、何のくさはひもなくあはれげなる、まかてて人びと食ふ。」

『源氏物語』の六帖・第七段、末摘花の一節です。雪の激しく降る日に、屋敷を訪れた光源氏が、こっそりと覗いた末摘花の邸宅の情景です。

訳すと、「けれども、ご本人の姿はお見えになるはずもない。几帳など、ひどく破れてはいたが、昔ながらに置き場所を変えず、動かしたりなど乱れてないので、よく見えなくて、女房たち四、五人

座っている。お膳、青磁らしい食器は舶来物だが、みっともなく古ぼけて、お食事もこれといった料理もなく貧弱なのを、退がって来て女房たちが食べている。」となるようです。

末摘花は、常陸親王の娘ですから、それほど低い身分の公卿の姫ではないのですが、壊れた調度を修理することなくそのままに使い続ける程度の経済力であったようです。女房の食卓には中国渡りの秘色のような青磁の器が載せられ、貧しい食事が行なわれています。

「秘色」は、中国の南方・呉・越の地方で焼かれた瓷器という焼物で、日本では越州窯青磁と呼んでいるものです。越州窯青磁の発色には幅があり、淡い青緑色のものから黄緑色のものまで見られます。

唐の文筆家であった陸羽(733~804年)が、茶の知識をまとめた『茶経』の器の項に、越州窯青磁の記載があります。

「碗は、越州が上、鼎州、婺州が次ぐ、岳州が上、寿州、洪州が次ぐ。ある人は、邢州を越州の上とするが、そのようなことはない。もし邢州の瓷器を銀にたとえるなら、越州の瓷器は玉にたとえられる、邢州が越州におよばない第一である。邢州の瓷器を雪にたとえるなら、越州の瓷器は氷にたとえられる、邢州が越州におよばない第二である。邢州の瓷器は白く、茶の色が丹くみえ、越州の瓷器は青く、茶の色は緑にみえる、邢州が越州におよばない第三である。」という越州窯青磁を碗の第一位に評価する賛辞です。



平安京内から出土した越州窯青磁



越州窯青磁碗と緑釉陶器碗

写真左は、平安京跡出土の越州窯青磁では最大径の碗。胎土はきめ細かく、釉はオリーブ・グリーンに発色する。『源氏物語』に登場する「秘色」を思わせる良質な製品。写真右の緑釉碗は、軟質な黄褐色の胎土で、褐色がかった濃緑色の釉薬が施されている。

このように高く評される越州窯青磁にしても、すべてが「秘色」と呼ばれるわけではなく、特に優れた皇帝のために選ばれた品で、臣下や庶民の使用を禁じられたものが「秘色」あるいは「秘色青磁」と呼ばれたようです。

ここで注目したいのは、「秘色青磁」であるか否かが問題なのではなく、あくまで「秘色のような中国のもの」という簡易な一文で越州窯青磁を示している、それが読者に理解されていたことです。さらに、裕福ではない末摘花の女官の食卓に越州窯青磁の碗が供せられている場面の描写が、違和感なく読者に受け止められていたであろうことです。

紫式部の生きた藤原道長の時代には、中流貴族程度の公卿でも中国産の越州窯青磁の器を、日常の食器として使用するほどに一般化しており、多量に輸入されていたと理解されます。紫式部のまわりにも、そういった公卿の生活があったのでしょう。

実際に、平安京内から出土する

越州窯青磁は、9世紀後半以降、確実に増加する傾向を示していて、口径が10cm台の小ぶりな碗や皿が中心ですが、なかには口径24.8cm・器高8.5cmの大きな碗もみられます。

あをし 『源氏物語』三十五帖・第四段、^{わか}菜・^げ下の一節に、^{おんなさんのみや}女三宮の琴に合わせて女性ばかりが合奏する際の明石上が従えた童女の服装について、

「明石の御方は、ことごとしからで、^{あかし}紅梅二人、^{あざみ}桜二人、^{あおし}青磁（あおし）の限りにて、^{あざみ}相濃く薄く、^{あざみ}目などえならで着せたまへり。」と描かれています。

訳では、「明石の御方は、仰々しくならず、^{あざみ}紅梅襲が二人、^{あざみ}桜襲が二人、いずれも青磁色（の^{あざみ}汗衫）ばかりで、^{あこめ}袷は濃紫や薄紫、打目の模様が何とも言えず素晴らしいのを着せていらっしやっだ。」となります。

青磁色の上着（汗衫）を着た4人の童女の正装の姿を記したものです。「青磁」は、『源氏物語』の「大島本」などでは「あをし」と

書かれていますから、「青瓷」とするべきなのでしょう。しかし、『延喜式』では「青瓷」は中国産の青磁ではなく日本で焼かれた緑釉陶器を指していて、産地を冠して尾張青瓷などと呼ばれています。

「あをし」は緑色の上着を示しているのかもしれませんが、紫式部の時代の緑釉陶器は、写真のように黒に近い濃い緑色をしています。とても紅梅や桜の襲色目の上に羽織る上着の色合いとは思えません。明るい青色から緑味を帯びた青色を呈した青磁器の色合いをさして「あをし」と記したと考える方が自然なようです。

今後、このような用例を探する必要はありますが、染め色の名称に用いられるほどに、越州窯青磁が当時の貴族社会に浸透していたのでしょう。

（原山 充志）

『源氏物語』の本文・訳文は、渋谷栄一氏によるホームページ「源氏物語の世界」から引用しました。